

昨年1年間を振り返ってみて、最大の出来事はやはり北海道胆振東部地震と言えらるう。阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震等、地震は日本全国いたるところで起きているが、まさか自分の居住地である北海道、特に生活の場と隣接する厚真町が震源地になろうとは想定外のことであった。

地震が発生して数日後に気付いたのだが、地震当日の午前7時過ぎに見舞いのメールが届いていた。私の故郷、和寒の小学校時代の友人K君からの励ましのメールであった。人的

『ユキユキの絆』と無常観

——地域に生きる——

情報広報部

橋本 洋一

被害の有無を問う気遣いの言葉がじわつと身に沁み渡った。

地震の翌日の昼過ぎに、電話が入った。鹿児島の中学時代の友人N君からであった。「電話しようか迷ったんだけど、大丈夫か心配で。忙しいところ、電話してごめんさい」。年のせいで涙腺が緩んだためか、涙で視界がぼやけた。数年前に3人の子供が自立し、奥さん孝行を兼ねて鹿児島から北海道旅行に来た時に、病院にも立ち寄ってくれた。病院の屋上に案内し、病院の向かい側にある職員駐車場を指

さして、数年後に病院の新築を検討している旨を説明した。まさに指をさした方向に、今回の地震の震源地である厚真町があった。

東日本大震災で医療支援に行った時に大変お世話になった、岩手県山田町の保健師のSさんから心温まるメールを頂いた。「ご無沙汰しております。今回の北海道地震をテレビで知り、苫小牧市も震度5とのこと、先生をはじめ、山田町に来ていた、いただいたスタッフの皆様被害が無かったかと心配しておりました。お忙しいと思います、電話は控えさせていただきます

ました。皆様がご無事であるよう祈っております」

役員の末席を汚して

いる日本〇〇〇△△協会の本部からも、地震当日の午前9時頃、メール

が届いた。「地震の被害の状況はいかがでしょうか。苦小牧市にもかなりの被害が出ているようです。今後の余震、被害の状況の把握、回復などお時間がかかるかと思えます。正副会長にも状況をお伝えさせていただきます。ご無事をお祈りいたしております」

日本各地からさまざまな立場で、お見舞いのメールや電話が相次いだ。心のこもった言葉の端々にヒトとヒトとの絆を強く感じた。急性、慢性を問わず、我々がある疾患を患い

治療のために入院したときに作動する地域医療病床構想に立脚した医療体制と、回復して入院治療を終えて退院し、地域に戻るときに作動する地域包括ケアシステムの両者は、表裏一体の関係にあり、その両者の構築こそが現在の重点課題の一つとして提示されている。慶應義塾大学の田中名誉教授のシエーマに示されているように、住み慣れた地域で生きていくためには、住まいと住まい方の存在が不可欠である。《住まいと住まい方》という鉢植えに《生活支援・福祉サービス》という土が置かれ、その土に植えられた植物は《医療・看護・介護・リハビリテーション、保健・予防》という3つの葉を伸ばす。

災害が頻発する昨今だが、鎌倉時代の歌人、鴨長明の随筆集『方丈記』にも台風、水害、竜巻、地震の記載があり、そういつた自然災害を見据えて、自分という存在や住居がいつ朽ち果てるか分からないという無常観が生まれてくる。【ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし】という有名な最初の記述にも見られる。水はけのいい痩せた土地で発育するたくましいブドウの木から生まれた、酸味のきいた道産ワインを口に含みながら、猪突猛進の新年を澄み切った無常観に身体を浸すのは、如何でしょうか？